

保育内容領域「表現」の授業におけるリトミックの実践と意義

横山真理* 安藤園子**

1. はじめに

本稿では、領域「表現」の科目¹⁾におけるリトミックの授業実践を取り上げる。この科目は、本学教育学部教育学科学校教育専攻学生対象の幼稚園教員免許の取得に関わる専門科目に位置付けられている。

領域「表現」の授業では、15回のうち2回分の授業を使ってリトミックの実技演習を導入している。リトミックの体験的な学修は、幼稚園教諭免許状の取得を目指す学生にとって、次の2点において意味があると考えている。1つ目は、音と動きを身体で感じながら表現する活動の幼児にとっての意味を体験的に理解することができる点にある。2つ目は、リトミックを通して学生自身の中にある音・音楽に内在するリズムに対する感性を覚醒させることができる点にある。ただし、本学において領域「表現」の授業カリキュラムの中にリトミックの実技演習を導入したのは今年度からであり、リトミックの体験的な学修が学生にどのような学びの充実をもたらすのか、丁寧に省察していくことが求められる。また、教員養成におけるリトミックの実践的研究については先行研究が意外にも乏しく、日本ダルクローズ音楽教育学会誌『ダルクローズ音楽教育研究』に限って言えば、時得（2010）以降現在まで研究成果は公開されていない。

以上より本稿では、本学教員養成カリキュラムにおける領域「表現」の科目に位置付けられたリトミックの授業実践を省察し、保育内容領域「表現」を扱う授業におけるリトミックによる体験的な学修の意義について考察することを目的とする。

2. 幼稚園教育要領における領域「表現」のねらい及び内容

はじめに平成29年告示『幼稚園教育要領』（文部科学省）（『要領』と略）に示されている、保育内容領域「表現」に直接関わる内容について、引用する。この内容は、幼児期の子どもの素朴な表現のあり方に共感し援助する保育者側の視点を導き出すものである。その意味で非常に重要であるため、少し長くなるが引用を基本として確認しておきたい。

『要領』では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目が掲げられている。その中で、保育内容領域「表現」に直接関わる項目として、以下の内容が示されている²⁾。

10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

また、『要領』では、保育内容領域「表現」のねらい及び内容について、以下のとおり説明されている³⁾。

* 東海学園大学教育学部 ** 愛知淑徳大学非常勤講師

表現

〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。〕

1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2 内容

- (1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージや動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

さらに『要領』では、以上の保育内容領域「表現」のねらいと内容を保育者がどのように取り扱うべきかについても、次の3つの事項に留意する必要性が示されている⁴⁾。

3 内容の取扱い

上記の取扱いにあたっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。
- (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

以上をふまえると、保育者は幼児の素朴で多様な表現の仕方やそこにある生き生きとした幼児の感性や心情に共感し、寄り添い、幼児自身が友達や保育者との関わり合いの中で自己表現を楽しむことができるように、環境構成や援助の仕方を考慮し工夫する必要がある。そして、そのような考慮や工夫の基盤となる資質や能力を身につけることが、幼稚園教諭免許の取得を目指す学生に求められていると言える。こうした観点から、本稿では領域「表現」の授業におけるリトミックの実践を省察し、学生にとっての学修の意義を見出したい。

なお、『要領』では感性と表現に関する領域「表現」の他、心身の健康に関する領域「健康」、人とのか

かわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」のねらい及び内容も合わせて示されており、これら5領域のねらい及び内容が幼児の具体的な体験を通して達成されるように総合的に指導するという観点が指摘されている⁵⁾。しかし本稿では、5領域を関連付けた指導の総合性に重心をおくのではなく、領域「表現」の固有性に着目しており、当該科目において「表現」と他の領域がどのように関連付くのかについては別稿に譲る。

3. リトミックについて

3.1 身体の動きを取り入れた音楽教育法「リトミック」

「リトミック」とは、スイスの作曲家・音楽教育家であるエミール・ジャック＝ダルクローズ (1865-1950) によって創案された音楽教育法である。ダルクローズはジュネーヴ・コンセルバトワールの教授時代に、大学での授業内容が音楽の美しさを感じ取ることより理論やテクニックが重視されていることなどに疑問を持ち、学生が心から音楽を感じ取れるように、心で音楽を聴き取る能力の育成を目指した新しい音楽学習法を考案した。歩行や腕のスウィングなど身体の自然な動きの特徴と音楽の特徴を結びつける音楽教育法を、ダルクローズは「優れた流れ」や「優れた動き」を意味する「リトミック」と名付けた。

音楽を動きと結びつけるリトミックの経験によって、音楽的感性と表現する意欲を育てることが期待できる。リトミックの中で、人は身振りで模倣する、動く、歌う、体を叩く、楽器を鳴らす、絵を描く、話すなど、多様な表現の仕方を通して、多様で多彩な音や表現が生まれる瞬間に出会う。その瞬間において、人がどのような音を出す時も、音を生み出す喜びに満ち溢れている人の様子を観察することができる。

人が出す、この喜びに満ち溢れた音は、一体どこからやってくるのだろうか。塩原 (2008) は、リトミックを「音楽をリズムの要素を中心にして身体の動きを通して教えるメソッド」と定義して、音楽への知覚が筋肉運動と密接にかかわることを示し、リトミックにおける身体の動きを通して音楽と私たちの内面世界を結びつけることができると述べている。人は歌う時、自然に身体が揺れたり、弾き歌いに合わせて歩き出したりする。音楽を聴くと同時に全身で音楽を感じながら歌を楽しむ姿から、人にとって「聴くこと」「歌うこと」「動くこと」は自然に結びついていることがわかる。そこで、リトミックの経験がどのようにして音や表現を生み出す喜びにつながるのかを考えてみたい。

3.2 リズムは動きである

ダルクローズは「リズム」について次のように述べている。

「リズムとは動きであり、動きは本来身体的なものである」⁶⁾。「何が音楽の表現を豊かにするのか、何が音楽の音の継続に命を吹き込むのか、それはリズムである。リズムのニュアンスは、同時に聴覚と筋肉感覚とで感じとられる」⁷⁾。このような言説から分かるように、ダルクローズは、リズムとは動きであり、リズムのニュアンスが音楽の表現を豊かにすると考えていた。それゆえ、リトミックはその中核にリズムを据え、川の流れのように変化に富んだリズムのニュアンスを身体の動きで応答していく。歩く、走る、揺れる、伸びるといった人間らしい自然な動きで音楽と共に動くことから、無理なくリズムの感覚を体得していくことができる。

また、ダルクローズは、音楽を味わわせ好きにさせるには人の内に聴く力を育成するだけでは充分ではなく、音楽において最も強烈に感覚的に訴え生命に最も密接に結びつく要素というのは、リズムであり動きである、と述べている⁸⁾。人は生命力に溢れている様相を美しいと感じるため、生命力は私たちの美意識の根底に存在している。私たちの生きようとする力から生まれた「動き」つまり「リズム」は生命の美の現れと言える。たとえばお風呂のお湯張り完了通知メロディなどの無意図的な発信音からは生き生きとした躍動美が感じられないことから、音楽において人によって意図的に構成された「リズム」が重要で

あることがわかる。この点に関して、ルードヴィヒ・クラークスは次のように述べている。「事象や形態をリズム化するものの正体は『生命そのもの』である。リズムの中で振動することは、それゆえ、生命の脈動のなかで振動することを意味する」⁹⁾。つまり、「リズム」とは音楽の脈動の「動き」であり、音楽の生命そのものだと言える。

3.3 心で聴く

音楽の学習において、音を「聴く」ことは最も大切なことである。ダルクローズがリトミックを考案したきっかけは、音楽教育を学ぶ学生が音楽を「聴く」ことができていないために、十分な音楽表現がなされていないことに気がついたことであった。ダルクローズは、「すぐれた音楽教育法というものはずべて音を出すことと同じく、音を聴くことの上に築かなければならない」¹⁰⁾と述べている。「聞く」と「聴く」では、聴覚の使い方が違う。自然に耳に入ってくる音を捉えることが「聞く」であり、音からいろいろな情報を得ようと意識してきくのが「聴く」である。

では、リトミックにおいては、音に意識を置いて「聴く」とはどのようなことを意味しているのだろうか。ダルクローズは、「耳は、音の強さ、強弱変化、音の連なりの緩急、音色などのさまざまな度合い、要するに音楽の色合いとよばれる音の表現的性質を構成するすべての要素のさまざまな度合いを感得できなければならないのである」¹¹⁾と述べている。さらに、「大切なことは子どもが音楽を心に感じとり、喜び迎え、音楽において心と身体が合一すること一耳でしっかり聴くばかりでなく自分の全存在で聴き入ることである」¹²⁾と結論づけている。

ダルクローズによれば、音楽を「聴く」とはいろいろな音とその組み合わせを鋭く識別できることではない。強弱や速度などリズムのニュアンスを感じ取り、音の連なりの緩急、音色の違いなど音楽の諸要素を繊細に捉えることのできる音楽的な聴覚の働きを指している。つまり、音楽を「聴く」とは音楽のリズムのニュアンスに意識をおきながら「聴く」ということなのである。さらにダルクローズは、「私たちがリズムを表現したり、知覚したりできるのは、身体全体の動きによってである」¹³⁾と指摘している。例えば、音楽に応じて歩くという自然でシンプルな動きから、拍の流れの方向や推進力や前進感を身体感覚を使って理解することができる。音楽に合わせて歩いていき音楽が止まったら歩くことを止め、始まったらまた歩き出すといった簡単なゲームから、リズムのもつ誘発性と抑制のやりとりが身体感覚を通して理解することができる。音楽の学習に動きを取り入れたリトミックは、動くことが目的ではない。音楽の中でなにが起こっているのか、様々なリズムのニュアンスを身体感覚を通して感応することで心が深く感じて動き、音楽の中で心と身体が一つになる喜びを味わう。つまり、音楽を「心で聴く」ことがリトミックの目的である。こうして、リトミックによって人の中に「心で聴く」耳が育つとき、初めて音楽が人にとって生き生きと感じられるものとなり、その感動を誰かに伝えたい、自分でも表現したいという欲求につながる。

4. リトミックの特徴と実際

4.1 リトミックの特徴

リトミックの最大の特徴は、音・音楽と動きを融合させる点にある。ダンスも音・音楽と動きを融合させた表現活動であるが、ダンスは美しく魅力的な身体の動きを見せることが第一の目的であり、音楽はその目的を達成するために有効な手段のひとつである。身体の動きと音楽を重ね合わせる体験によって様々な感覚が研ぎ澄まされ、心から音楽を感じ取ることを目指しているリトミックとは目的が違う。今の自分が持てる力で自分なりの表現をするリトミックによる感性的体験から、誰かに「伝えたい」「表現したい」という気持ちが生まれる。リトミックが有するこのような特徴から、体験を通して感性と表現を育むこと

が期待されている幼児教育において、リトミックが取り入れられてきた所以があるのだろう。また、音楽に耳を傾けながら音楽に合わせて動くとその変化に素早く気づき順応することから注意力や適応力が高まり、音楽と一緒に動く時間の流れの中で空間の広がりを感じ取る力が養われる。さらに他者の表現を共有しながら協同することで共感性や社会性、創造性が育まれる。以上のことから、リトミックは人間的成長を見据えた幼児教育に寄与することができると言える。

4.2 グループ・空間・マテリアルの活用

リトミックの実際の指導では、音・音楽と動きの結びつきを有効にさせるために、「グループ」、「空間」、「マテリアル」という、リトミックの環境を構成する3つの要素を活用する。これはリトミックによる音楽教育法における一般的な枠組みである（表1）。

(1) グループ

「グループ」については2人、3人、4～5人の小集団、10人くらいの中集団、参加者全員、などいろいろな人数で編成される。いろいろな人数の集団内で関わり合うことにより、より豊かなコミュニケーションが生まれることが期待されている。

(2) 空間

歩く・走るといった移動もできる十分な「空間」があれば、音楽の中にある前進する感覚や時間と空間とエネルギーの自然な関係を全身でたっぷりと体感することができる。

(3) マテリアル

「マテリアル」は直訳すると「素材」であるが、ボール、フープ、スカーフなどの教具や楽器、絵本やあそびうた、詩などがある。特に、絵本はさまざまな色、形、言葉、物語など感覚に直接働きかけて人の心を動かす身近な環境であるため、音・音楽や動きと相性が良く活用しやすい素材である。

表1 リトミックの環境を構成する要素

要素	具体例
グループ	2～3人少人数グループ・4～6人小集団・10人くらいの中集団・1対大人数・参加者全員
空間	ピアノレッスン室・音楽スタジオ・ダンススタジオ・コンサートホールの舞台・学校の教室や音楽室・保育ルーム・屋外の広場・体育館
マテリアル	① 教具：リトミックスカーフ・フラフープ・リズムスティック・いろいろな大きさのボール・カラーボード・ロープ・リボン・ゴム・新聞紙・風船他 ② 楽器：リズム楽器・鉄琴・木琴・ハンドベル・トーンチャイム他 ③ 自然素材：石・木片・貝殻・木の葉など ④ 生活廃材：ペットボトル・ラップの芯など

5. リトミックの実践と省察

ここで取り上げるリトミックの実践は、東海学園大学教育学部教育学科学校教育専攻2年学生を対象とした、保育内容領域「表現」の授業であり、外部講師を活用したリトミックの活動はシラバスに示された15回の授業回のうち第2回及び第3回の授業回に位置づけられていた。

なお、ここでの実践のまとめと省察については、外部講師として授業を実践した安藤園子が執筆している。本稿における授業実践の諸記録（画像・学生によるワークシートの記述物）の使用については、授業実践の事前に口頭および文書にて、記録の使用目的や個人情報の保護などについて説明し、同意が得られた学生の記録だけを使用している。

5.1 授業実践の概要

授業実践の概要は、以下のとおりである。

- 実践時期 2023年4月14日2時限、21日の2時限（いずれも90分）
- 実践場所 東海学園大学名古屋キャンパス 体育館
- 対象学生 教育学部教育学科学校教育専攻2年（20人）
- 授業実践者 安藤園子（リトミックの実技演習）
横山真理（学生に対する全体指導）
- 環境構成（使用されたマテリアル・空間）（図1から図4）



図1 打楽器類1



図2 打楽器類2



図3 打楽器類3



図4 使用された空間

5.2 第2回授業におけるリトミックの実践

本時のねらいは、学生自身が実際にリトミックを体験することでその考え方と方法について理解することとした。以下、活動の流れを概略的に説明する。

(1) 演習に入る前の準備

- ① ジャンベの音に合わせて歩く。
- ② 合図が聴こえたらペアで向かい合い、四分休符のリズム（J J J）に合わせて、手拍子3回→膝を3回叩く→ペアと3回手合わせ→自由に踊る、という順番で動く。
- ③ 1人でジャンベの音に合わせて歩いていき合図が聴こえたら新しいペアをつくり②を行う。

④ リトミックの考え方を準備運動①②③の活動と照らし合わせて理解する。

表2は、授業中に実践者がホワイトボードに記した板書を転記したものである。

表2 授業中の板書

What	音・音楽
How	身体感覚（聴覚、視覚、触覚、筋肉感覚）を使って直感的に捉える。
Why	① 音楽に含まれる意味や内容を理解し、音楽的感性の高まりや音楽的表現力の向上に役立てる。 ② 音楽を使って心と身体の調和を図り、反応力や適応力、共感性や創造性など人間の諸能力を育む。

(2) 演習A

音楽を形づくっている要素（拍・速度・強弱・勢い・リズム・音色）を聴覚、視覚、触覚、身体感覚で感じ取りその本質（音楽に含まれる意味や内容）を感覚的に理解する。

演習A-1 1人の活動

- ① ピアノで弾かれる音楽の拍にあわせて指先で円を描くように手を叩く。
- ② 「ハイ」の合図で、音楽の拍にあわせてステップする。
- ③ 「ハイ」の合図で、①と②の交互活動に即時的に反応する。
- ④ 音楽の強弱の変化に気づき、強弱の違いが感じられるように手拍子を叩く時の手の動かし方やステップの歩幅を変化させて表現する。
- ⑤ 音の高さを聴き分けて高い音の拍は手を叩き、低い音の拍はステップする。
- ⑥ 音楽のテンポの変化に気づいたら即時に止まり、心の中で身体が反応するようにイメージし、「い」の合図でその変化に従いステップする。



図5 演習A-1 1人の活動の様子（図4再掲）

演習A-2 全員の活動

- ① 輪になりひとり1拍ずつ（♪）手を叩いて隣の人に回していく。
- ② ①+反対の方向に回しても良いことにする。
- ③ 手を叩かないで（四分休符）をアクション（身体の動きやポーズ）で回す。
- ④ 手拍子・アクション・反対の方向へ回す。これらの3つの中から1つないし2つ（例えばアクションを反対方向へ回す）を選び、流れにのって拍を回していく。
- ⑤ 音楽の拍にあわせて④を行う。



図6 演習A-2 全員の活動の様子

(3) 演習B

いろいろな絵本の中の絵や言葉から呼び起こされたイメージを身体の動きで外化し、その動いた体験から感じ取ったことを音にする表現を試みる。

演習B-1 ペアでの活動

- ① いろいろな絵本を鑑賞する。
- ② ペアをつくり絵本の図形の中から2人でひとつ選び、図形の色や形、言葉を身体の動きで表現する。



図7 演習B-1 ペアでの活動の様子

- ③ 教師の歌にのって歩いて行き、歌の終わりで別のペアとお互いの言葉&動きをとりかえっこする。
- ④ 最後にもらった言葉&動きを一組ずつ発表する。

演習B-2 全員での活動

- ① 輪になり、ペアで発表した言葉&動きをリズムにのって一組ずつつなげていくことで、全員でひとつになる表現のかたちをつくる。
- ② 様々な楽器の中から自分たちの動きの特徴に合う音を選び、動いた感じをそのまま音で表現する。
- ③ ①と同じようにリズムにのって1組ずつ順番に音をつなげていき、全員でひとつになる表現のかたちを楽しむ。



図8 演習B-2 全員での活動の様子

5.3 第2回の授業実践の省察

学生のワークシートの記述内容を手がかりに、第2回の授業実践を省察的に報告する。

リトミックの最大の特徴は音・音楽と動きを結びつける感覚的な体験によって音楽の概念的な知識を学習することにある。担当教員によれば、受講学生はほぼ全員がリトミック活動を行った経験がないとのことだった。その情報から、学生にとっては初めての活動に参加することから生じる不安や緊張、声や身体によるパーソナルな表現に対する抵抗感や恥ずかしさといった感情から、消極的な行動になってしまうことも十分に予測された。しかし、「グループ」「空間」「マテリアル」の3つの要素の組み合わせによって、個々の学生がもっている力が引き出され、消極的な行動が解消されるという見通しもあった。音・音楽と動きを結びつける感覚的体験を通して、リトミックについての知識理解が促進されることを期待した。以下に報告するように、リトミックの環境を構成する3つの要素である「グループ」「空間」「マテリアル」を活用しながらリトミックの活動を進めていくという授業の設計により、学生は「リトミックとはどのようなものなのか」といったリトミックの考え方とその方法について、体験を通して知識を得て理解につなげることができたのではないだろうか。

(1)「グループ」の活用に関して

「グループ」の活用に関しては、活動内容に合わせた適切な人数を考慮し、様々な人数の集団で活動することを通して人と関わり合いが広がるように計画し実践した。以下、学生のワークシートの記述内容を手がかりに「グループ」の活用成果を考察する。

「グループ」の活用に関する学生のワークシートの記述内容の例は、表3のとおりである。記述内容から、「グループ」の活用によって豊かなコミュニケーションが生まれ、学生同士がそれぞれの表現の違いを尊重し認め合い、他者と協同する喜びを感じることができていることが推測される。このように、リトミックにおける「グループ」の活用は、学生の内面にコミュニケーションの喜びや表現の多様性の尊重といった感情を喚起させる上で効果があると考えられる。

表3 「グループ」の活用に関する記述内容の例

No.	記述内容 (抜粋)
1	オノマトベの絵本を動きや楽器で表現しそれぞれの「音」をつなげた活動が楽しかったです。
2	同じ条件でも同じ動きをしている人はひとりもおらず、全員自分が考えた動きをしていた。
3	ルール内でふざけてもいい感じが楽しかった。
4	みんなそれぞれ動きが違ったり楽器によって表現の仕方が変わるから楽しかったです
5	自分が感じたことを否定されることなくみんなが主役になれるから楽しいと思った。
6	自分が考える動きと他の人が考える動きは一緒ではなくてそういう動きもあるのか、と発見ができた。

7	色んな人とリズムを合わせて心を合わせるところが楽しかったです。
8	自分達のことだけにフォーカスせずに他人の感覚や感性みたいなものを知ることが出来た。皆で協力しながらやる音楽（リトミック）がシンプルに楽しかった。
9	友達と協力して自分達だけの動きをつくれたこと、最後にみんなで輪になって順番に奏でることがなんか平和でとても印象に残っています。
10	他のペアをみて新しい表現の仕方を見つけることができた。
11	どのペアも個性あふれる表現の仕方で、私には思いつかないような表現をしていたのがとても印象的でした。一人一人が感じることの相違や個性について認識したとともにとても感心しました。
12	一人でやるのではなく、大人数でやることで盛り上がり生まれるからではないか、環境が大切だと感じた。
13	リズムに合わせて動くだけでも、みんなそれぞれ感性の違いが表れた表現を見られたり、自分たちが考えたものをみんながやってくれたりみんなのをやったりしたのが楽しかった。それは感性を伸ばすうえで他者の感性を感じ取ることや、自身の感性は周囲に受け入れられるいいものだと思えるからだと自然に知覚したからだと思う。

(2) 「空間」の活用に関して

「空間」の活用に関しては、空間内を広く使って自由に移動する動的な活動と集合する、円になるなどその場で行う静的な活動を交互に行うことで、空間を利用して活動に緩急の流れをつくり出し、学生がその流れにのって活動の1つひとつに集中できるように計画し実践した。以下、学生のワークシートの記述内容を手がかりに「空間」の活用成果を考察する。

「空間」の活用に関する学生のワークシートの記述内容の例は、表4のとおりである。実践は、音がよく響く静かで広々とした体育館で行った。また、空間内を自由に移動する、お互いがよく見えるように全員で円になって行く、全員が一箇所に集まって絵本を見る、グループごとに好きな場所で行う、2グループに別れてグループ同士向かい合うなど、活動に合わせて多種多様な「空間」の活用を試みた。その結果、安心して伸び伸びと動くことを自然に楽しんでいる学生の様子が生まれた。記述内容からも、学生が「空間」を活用して音楽と身体の動きを重ね合わせ心身の協応する楽しさを感じていることが推測できる。

表4 「空間」の活用に関する記述内容の例

No.	記述内容（抜粋）
1	リズムや強弱の変化を感じ取って音楽に合わせて歩いたり身体全体で表現することで表現する楽しさを感じることができた。
2	音の強弱や速さをあんなにも体や動きで表すことが出来ると知ることができて興味を持って楽しかった。
3	決まった動きではなく自分で考えた動きを定期的に変えながら表現するのが楽しかった。
4	強弱に合わせて動いたり表現をすることは新鮮で、子どもたちがリトミックをしたらより新しい学び、楽しい気持ちを知るきっかけになると思った。
5	ただ歩くだけなのにリズムや曲調を変えたりすることがとても楽しかった。
6	音楽の選曲によって動きの違いがあったりしたのが楽しかった。
7	円になって拍を送り合う活動は目で拍を理解できたのでとても楽しいと感じました。
8	リズムにのって歩き回る活動で周りの人と交流するのが楽しいと感じた。

(3) 「マテリアル」の活用に関して

「マテリアル」の活用に関しては、学生自身から活動のイメージや興味関心を引き出したり、身体表現を助けたり発展させたりといった効果を期待して計画し実践した。以下、学生のワークシートの記述内容を手がかりに「マテリアル」の活用成果を考察する。

「マテリアル」の活用に関する学生のワークシートの記述内容の例は、表5のとおりである。実践では、絵や文字から音に関する視覚的な情報を得ることができる絵本（元永定正さく（1986）『がちゃがちゃどんどん』福音館書店）と、「音になって動いた」ことから「音で表現する」経験へと発展させるためにリズム楽器（図1に掲載の写真を参照）を活用した。記述内容から、「マテリアル」としての絵本は学生自身の音や動きのイメージを引き出し、「マテリアル」としての楽器を活用することで、活動を「面白い遊

び&表現」と捉えるなど、学生は感じ取ったことを音で「表現する」ことを楽しんでいただけたことがわかる。また表5中のNo.4の記述から、演習B-2③の活動において、その学生は楽器の音を単なる「音」としてではなく学生全員が奏でる「音楽」として感じていたことが推測される。このことから、「様々なリズムのニュアンスを身体の動きを通して感応することで心が深く感じて動き、音楽の中で一つになる喜びを味わう」リトミックについて、体験を通して知識を得て理解につなげることができたのではないだろうか。

表5 「マテリアル」の活用に関する記述内容の例

No.	記述内容（抜粋）
1	自由に表現していいと言われて自分なりの「ぶわぁ」（絵本の中の言葉）って感じになった気がする。
2	音を体で感じる事ができた。
3	絵本の擬音を体を使って表現することで一人一人の個性がとても現われていると感じました。
4	様々な楽器を使って“音楽”を奏でることが楽しいと感じた。
5	オノマトペの絵本からイメージしたものを身体で表現してみたり、楽器の音で表現したりする活動が印象的だった。
6	絵本を実際に音にしてみようという活動も今までになくて面白いと感じました。
7	リトミックをすることで楽器に親しみを持つことができると思った。
8	楽器を使う前に自分たちの体で表現しイメージを固めてから楽器を実際に使うことでよりみんなのその言葉への表現を詳しく感じられる面白い遊び&表現だった。
9	リトミックがどういうものか知れたことがまずは心に残りました。
10	挨拶するという当たり前な行動にリズムや手振り見振りを加えることでより仲が深まるような感じがした点がとても良かった。このような導入部分で子どもたちの興味を引き、楽しいと思わせることの重要性を改めて理解することができた。
11	決まった動きではなく自分で考えた動きを定期的に変えながら表現するのが楽しかった。
12	自然とリズムに合わせて動きたくなるようなジャンベの音も魅力的だなと感じ、楽器の選び方ひとつでもリトミックの活動の色が変わるのがすごく面白く奥が深いと感じました。

5.4 第3回授業におけるリトミックの実際

本時のねらいは、楽曲の持つ全体の雰囲気や言葉に合う動きを伴いながら歌い、歌から感じたことやイメージしたこと、考えたことを音楽に合わせて身体表現することそのものを楽しむ体験を通してリトミックと領域「表現」を含めた5領域全般との関連性を考えることとした。以下、活動の流れを概略的に説明する。

(1) 演習に入る前の準備

- ① あいさつのうたを覚えてうたう。
- ② ペアで①のうたの振り付けを考える。
- ③ 1組ずつ発表する。
- ④ 各チームの振り付けを順番につなぎ合わせていき全員共通の振りを創る。
- ⑤ 全員で二重の円をつくり、向かい合うペアをチェンジしながらいろいろな人と歌い合う。

(2) 演習Cと課題

- ① 《大きな歌》（中島光一作詞・作曲）の楽譜を見て、ピアノに合わせて初見視唱する。
- ② 歌詞を唱えながら先行して動く教師の後に続いて模倣する。
- ③ 歌いながら先行して動く教師の後につづいて模倣する。
- ④ 先行する人と模倣する人の2つのグループに分かれ、ピアノに合わせてお互いの動きを見合いながら歌う。



図9 演習C《大きな歌》の活動の様子

- ⑤ 先行と模倣の役割を交替するが、④のときとは違う音楽の変化に気づきその意味を考える。
- ⑥ ⑤で気づいた音楽の変化を身体の動きで表現しその意味を考える。
- ⑦ 課題1「はじめに楽譜を見て歌ったときと動きながら歌ったときとは、歌唱表現においてどんな違いが感じられましたか」について考えをまとめ記述する。

(3) 演習Dと課題

- ① 「バースデーラインゲーム」を行い、誕生日が同じ季節の人とグループをつくる。
- ② 季節から連想される言葉を探し、グループで1つ、《大きな歌》の替え歌を作る。
- ③ ②の替え歌に合う動きをグループで考えピアノに合わせて動きながら歌う。
- ④ 1組ずつ発表する。
- ⑤ 同様に「すきなもの」「きれいなもの」をテーマに全員で言葉を出し合いそれぞれ一曲ずつ替え歌をつくる。
- ⑥ 「すきなもの」は長調のピアノ伴奏で歌い、「きれいなもの」は短調のピアノ伴奏で歌う。
- ⑦ 課題2「この活動は、他の4つの領域のどの領域とどのような点で関連があるか考えてみましょう」について考えをまとめ記述する。



図10 演習D 「バースデーラインゲーム」の活動の様子

5.5 第3回の授業実践の省察

学生のワークシートの記述内容を手がかりに、第3回の授業実践を省察的に報告する。演習Cについてのワークシートでは、教師は「課題1 はじめに楽譜を見て歌ったときと動きながら歌ったときとは、歌唱表現においてどんな違いが感じられましたか」という設問を示し、学生は演習Cの活動が終了した後に活動を振り返って考えをまとめ記述した。学生のワークシートの記述内容の例は、表6のとおりである。学生の記述内容から、学生は楽譜を見て歌った時とリトミックで動きながら歌った時との歌唱表現の違いを感じ取り、歌いながら動く表現活動の意義を考えようとしていたことがうかがえる。つまり、学生は単に口先だけで歌うのではなく身体全体を使った動きによって《大きな歌》の音楽の動きとその楽しさを感じ取ることができていた。また、この曲は主旋律を副旋律がこだまする追走曲（カノン）であるため、動きと歌で歌詞の意味世界を伝え合う楽しさも味わうことが可能である。学生の記述内容から、動きながら歌う活動を通して、動きと歌で歌詞の意味世界を伝え合う楽しさを味わいながら表現していたことがうかがえる。以上のような学生の姿から、歌詞や旋律の動きがおおらかな雰囲気をもつ《大きな歌》を選曲したことは効果的だったと評価して良いだろう。

演習Dについてのワークシートでは、教師は「課題2 この活動は他の4つの領域のどの領域とどのような点で関連があるか考えてみましょう」という設問を示し、学生は演習Dの活動が終了した後に活動を振り返って考えをまとめ記述した。学生のワークシートの記述内容の例は、表7のとおりである。学生の記述内容から、学生は「人間関係」「言葉」「健康」「環境」という「表現」以外の様々な領域と関連付けて、幼児にとってのリトミックの活動の意味を考え意義づけていることがわかる。以上のような学生の姿から、領域「表現」に関する学修にリトミック体験を位置付けたことは、幼児の体験的な活動において5つの領域は密接に関連していることへの理解につながるものとして評価できるだろう。

表6 演習Cの活動に関する記述内容の例

No.	記述内容の例
1	歌詞を表現しやすかったことから体全部を使って表現することの大切さがわかった。
2	大きく元気に歌うことができた。
3	歌詞を覚えやすい。
4	どこを強く歌うのかが分かりやすかった。
5	メロディが浮かんだ。
6	作者が伝えたかった楽しさが十分に伝わってきた。
7	身体が勝手に動いてノリやすくなり歌いやすさも増した。
8	声（歌）で表現しやすかった。
9	歌詞の意味が深く理解できた。
10	強弱の違いの表し方など表現力が増した。
11	歌詞をより具体的に思い浮かべながら歌えた。
12	歌詞の意味を考えようという気持ちが高まった。
13	楽譜を見て歌う時はきれいな声を意識して歌ったが、動きながら歌ったときは動作に集中したので歌声への意識が少なくなっていたと感じた。

表7 演習Dの活動に関する記述内容の例

() は関連性があると答えた人数（母数は17人）

領域	記述内容の例
人間関係 (17人)	<ul style="list-style-type: none"> ・リトミックの活動をすることで仲良くなる。 ・話し合うことでコミュニケーションを取ることができる。 ・仲間と一緒に歌詞や動きを考える。 ・チームやペアで協力し合う。 ・いつでも人と話し合いながら動く。 ・ペアで、グループで、全員でといろいろな人と関わるから。 ・活動を通して自分の思う音・音楽を自分なりに表現しながら人と関わる。 ・リズムを通していろいろな人とコミュニケーションできる。 音楽に合わせてのびのびできるから。 ・言葉なしで人と関わり合うから。 ・音楽を通して他の人の意見を受け入れやすく、共感しやすくなる。
言葉 (16人)	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の内容を体で表現するとき言葉をイメージすることが重要だと思った。 ・活動の中で言葉を使って対話するから。 ・季節や季節の話題に関係しているワードを使うところ。 ・季節の替え歌を創ることでその季節のイメージが湧いた。 ・歌のリズムに合う言葉を当てはめて伝えるから。 ・春夏秋冬の替え歌を創る際、その季節に関連した言葉を探すから。
健康 (13人)	<ul style="list-style-type: none"> ・のびのび動けるところ。 ・体を動かすから。 ・感じたことを、体を動かしながら行うから。 ・リズムによって身体を動かすこと。
環境 (11人)	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ季節に生まれた人同士で季節の替え歌を創る活動は領域「環境」と深く関わっている。 ・いつでも人と話し合いながら動ける環境にある。 ・広い空間を使用したことから。 ・絵本や楽器などモノを使って活動したことでできることが増えた。 ・空気が綺麗で気持ち良く身体を動かすことのできる環境で活動したこと。 ・季節についてイメージをしっかりとつことのできる。 ・春夏秋冬に関係した言葉を探したところ。 ・ペア、グループ、全体での活動。

6. 保育内容領域「表現」の授業におけるリトミックの意義

本稿の目的は、領域「表現」の授業におけるリトミックの体験的な学修の意義について考察することであった。そのために、保育内容領域「表現」の授業15回のうち第2回および第3回の授業に位置付けられたリトミックの実践を省察的に報告した。以上をふまえて、最後に保育内容領域「表現」の授業において学生がリトミックを体験的に学修することにどのような意義があるのかについて考察する。

今回のリトミックの実践においては、リトミックの環境を構成する3つの要素である「グループ」「空間」「マテリアル」を活用しながら体験的な学修を進めていくという授業が設計されていた。それにより、学生は「リトミックとはどのようなものなのか」といったリトミックの考え方とその方法について、体験を通して理解することができたと言えるだろう。第1に、「グループ」の活用は、学生の内面にコミュニケーションの喜びや表現の多様性の尊重といった感情を喚起させる上で効果があると考えられる。第2に活動に合わせた多種多様な「空間」の活用は、安心して伸び伸びと動くことを自然に楽しむ学生の姿を引き出し、「空間」を活用して音楽と身体の動きを重ね合わせ心身の協応する楽しさを体感させることにつながった。第3に楽器や絵本といった「マテリアル」の活用は、「様々なリズムのニュアンスを身体の動きを通して感応することで心が深く感じて動き、音楽の中で一つになる喜びを味わう」リトミックの醍醐味を学生に感受させるものとなった。さらには、歌う活動においても身体全体を使った動きの中で音楽を感じながら表現するリトミックは、快の感情や自分を外に表現しようという気持ちを学生にもたらし、学生同士の身体の動きを通じたコミュニケーションを活性化させる。

以上に述べたことをふまえると、「グループ」「空間」「マテリアル」という、リトミックを特徴付ける3つの要素を基盤に、学生自身が身体を通してリズムや音に対する感性を覚醒させ人とのコミュニケーション力や感情を働かせて表現の喜びを体感することができる点に、リトミックの活動上の特徴があると言える。したがって、リトミックによる体験的な学修は、保育者として必要な資質、すなわち、幼児期の子どもの豊かな表現と内面の世界に共感し、幼児と共に表現する楽しさを味わい、幼児の発達を援助することができるような資質を育成する上で、非常に大きな役割を果たすと言える。この点に、保育内容領域「表現」を扱う授業にリトミックによる体験的な学修を位置付けることの意義がある。

注

- 1) 本学では、学校教育専攻学生を対象とした領域「表現」に関する専門科目と保育専攻学生を対象とした領当該専門科目とは区別されており、それぞれ別の教員が担当している。したがって、本稿で論じている内容は、保育専攻学生を対象とした当該専門科目とは関係がないことを断っておく。
- 2) 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』 文部科学省ホームページ, p. 5 https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf (2024年1月7日閲覧)
- 3) 同上, pp. 17-18
- 4) 同上, pp. 17-18
- 5) 文部科学省 (2017) 前掲書では、次のように示されている。「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」。
- 6) ダルクローズ E.J. 著／山本昌男訳 (2003) 『リズムと音楽と教育』 全音楽譜出版社, p. 47
- 7) 同上書, p. 62
- 8) 同上書, p. 73

- 9) ルードヴィヒ・クラゲス 杉浦實訳 (1971) 『リズムの本質』 みすず書房, p. 103
- 10) ダルクローズ (2003) 前傾書, p. 32
- 11) 同上書, p. 57
- 12) 同上書, p. 59
- 13) 同上書, p. 44

引用・参考文献

- ヴァージニア・ホッジ・ミード著／神原雅之他訳 (2006) 『ダルクローズ・アプローチによる子どものための音楽授業』 ふくろう出版
- 塩原麻里著 (2015) 「リトミック教育に関する理論的考察—音楽的感情と隠喩のプロセスに注目して—」 日本ダルクローズ音楽教育学会創立40周年記念論集「リトミック教育研究」, pp. 89-99
- 時得紀子 (2010) 「初等教員養成におけるリトミック指導の一考察—創造力と課題解決力を培う音楽づくりを中心に—」 『ダルクローズ音楽教育研究』 通巻第35号, pp. 33-43
- 元永定正さく (1986) 『がちゃがちゃどんどん』 福音館書店
- 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』 文部科学省ホームページ (2024年1月8日掲載確認)

付記

1. 執筆分担は、次のとおりである。1.はじめに、2.幼稚園教育要領における領域「表現」の内容、6.保育内容領域「表現」の授業におけるリトミックの意義 (以上、横山真理)。3.リトミックについて、4.リトミックの特徴と実際、5.リトミックの実践と省察 (以上、安藤園子)。
2. 本稿は、東海学園大学研究倫理委員会の承認を得ている (受付番号2023-16)。授業での学生のワークシートの記述や記録画像の使用については、受講学生の同意を得ている。